

ご復活おめでとうございます。

2020年以来のコロナ禍で教会に集うことが難しかった時期には、教会の聖歌も歌えない日々が続きました。ようやく、2023年になってから、少しずつその規制が緩くなり、感染対策に十分気をつけながら聖歌を歌えるようになってきました。その間に、カトリック教会の典礼文が改訂され、2023年度の典礼暦の始まりとともに、新しい典礼文を唱えるようになりました。コロナ禍がようやく落ち着いてきて、私たちが声を出して祈りを唱えたり聖歌を歌ったりすることができるようになりましたので、改訂を実施するにはよい機会だったのかもしれない。

典礼文の改訂の話が出て来た時には、何が変化するのか、具体的には信徒の側にわからなかったように思います。徐々に、ミサの典礼文の様々な箇所ですこずつ改訂されることがわかってきました。なかでも、次の文言は無意識なぐらいに唱えてきたので、逆に意識的にその意味を考えることになりました。

それは、小さな受け応えですが、ミサの最初から最後まで、何度も繰り返される、「主は皆さんとともに」、「また司祭とともに」です。改訂後には応える方が、「またあなたとともに」となりました。ラテン語では“Dominus vobis cum”, “Et cum spirit tuo”です。今回も直訳の「またあなたの霊とともに」にはならなかったようです。このラテン語は子どもの頃、侍者をしていて覚えました。まだ第二バチカン公会議以前の典礼で、ラテン語で侍者が受け応えをしていました。その頃は、何もわからずに唱えていましたが、大学でラテン語を学んだ時に、すごく懐かしかったことを思い出します。

さて、聖歌を担当する立場でもっとも不

安だったことは、通常文(ordinarium)と分類されて、いわゆる「ミサ曲」と称される祈りです。従来、「あわれみの賛歌」、「栄光の賛歌」、「感謝の賛歌」、「平和の賛歌」として歌ってきました。私たちはすでに日本語のミサ曲を歌っていますので、日本語が変化すれば、音楽はそれにとまって変化せざるを得ません。ということは、従来歌ってきた聖歌はどうなるのだろうか、新しい聖歌が作曲されるのだろうか、と推測するしかありませんでした。ラテン語の Kyrie, Gloria, Sanctus, Agnus Dei はもちろん変わりません。今度の改訂は日本語訳の問題なので、日本だけの問題です。第二バチカン公会議から半世紀以上が経ち、その間に多くの日本語聖歌が作曲されてきました。それらは日本のカトリック教会の大きな財産であると考えます。

教会が日々新しくなっていくのは、歴史を見れば明らかです。新しい日本語へと変化するのもその歴史の一場面でありましょう。ただ、私自身が音楽学者として言えることは、言葉が変化すれば音楽は変化せざるを得ない、というごく当たり前のことであるながら、大変大きな課題が生じる、ということ。その現実を多くの信徒が突きつけられて対応しなければなりません。

ちょうど皆で声を出して聖歌を歌えるタイミングで、新しい「ミサ曲」を歌うことになります。かつて、『未知との遭遇』という映画がありましたが、まさに新しいミサ曲はひさしぶりの新しい未知の聖歌との「遭遇」という気がいたします。信徒の皆さんがこれらの曲の言葉と音楽との関係をよくわかって一緒に歌えるように、聖歌隊の方でもしっかりと練習してまいりたいと思っております。